

源平物語義太夫節人形浄瑠璃の作劇法考究

— 説話的見地から —

伊藤りさ

一、本論文の目的と構成

本論文は、説話的観点から義太夫節人形浄瑠璃（以下、「浄瑠璃」とする）の戯曲について分析をおこない、その戯曲構成や作劇方法の特色の一端を明らかにすることを目指すものである。

考察の対象としては、本論文が提起する「説話的観点に立った浄瑠璃作品の分析」という方法論の有効性をより明確に示すために、こうした研究方法にもっとも適した対象を選ぶことが何より優先されるべきであろうとの見地から、源平物浄瑠璃を取り上げた。

源平物に関する先行研究は少なくないが、それらの中で平家物語

に言及される場合は主に出典・典拠としての扱いであり、作品の構成部分としての性格の質的な差異について積極的に論じたものはほとんどないように思われる。本論文では、源平物浄瑠璃と平家物語の関係について考える場合、単なる出典論に留まるのではなく、素材とされた話柄の平家物語における性格・位置づけと浄瑠璃におけるそれとを比較することで、戯曲としての浄瑠璃の本質が見えてくるのではないかとの見通しの下、「説話」という視点を導入することによって、こうした性格の違いをより明確に把握することを目指した。

本論文の中心となるのは、浄瑠璃の黄金時代と言われる延享・寛延期であるが、論全体としては近松門左衛門が竹本義太夫のために『出世景清』を書き下ろした貞享二年（一六八五）年以降、浄瑠璃興行の中心が専ら旧作の再演へと移っていくようになる以前、具体的には寛政年間（一八〇〇）あたりまでの約百十五年間を対象とする。

本論文の構成は以下のとおりである。

緒言 説話から見た源平物浄瑠璃—前提としての平家物語とその説話世界—

第一章 近松とその後継者たちによる軍記受容の様相

第二章 義太夫節人形浄瑠璃最盛期のドラマツルギー

### 第三章 宝暦期以降の源平物浄瑠璃における平家物語とその周辺

附論 壬生村の石川五右衛門―方法論の展開としての『木下蔭

狭間合戦』試論―

結語 浄瑠璃と説話世界―広がる展開の可能性に向けて―

#### 二、「緒言」の概要

緒言では、本論文における「説話」の概念を「あらゆる領域に遍在するメディアであり、世界を認識する媒体であり、また、ある言説、事柄、事件に含まれる情報のうちから、説話管理者の価値観に基づいて伝えるべきポイントをつかみ出し、コンパクトな形でまとめたまとまりの話柄」と規定した上で、説話的観点による源平物浄瑠璃の戯曲研究とは、端的に言えば、平家物語に取材した話柄を、浄瑠璃作者はどのように加工・脚色し、浄瑠璃の戯曲として再構成していったかについて、「説話」という平家物語の構成レベルに着目して検討することであることを述べた。

また、本論文の考察の前提として、近世における平家物語享受の

状況を、主に諸本の流布状況を中心に整理した上で、本論文では平家物語のテキストとして、基本的に流布本と『源平盛衰記』を用いることを述べた。

#### 三、「第一章」の概要

第一章では、貞享二年から寛保年間（一七四三）までの源平物浄瑠璃を対象に、作者ごとの平家物語の説話受容の傾向を確認するとともに、その考察をもとに、個別の作品における源平物浄瑠璃の作劇法について論じた。

第一章は次の五節から成る。

第一節 貞享く寛保期の源平物浄瑠璃の作劇法の特徴―近松・文耕堂・宗輔を中心に―

第二節 『仏御前扇軍』論―近松と文耕堂の作劇法の差異に注目して―

第三節 『鬼一法眼三略巻』三段目攷

第四節 『ひらかな盛衰記』小論―『源平盛衰記』との関連を軸に―

第五節 第一次豊竹座時代における宗輔の平家物語受容―『蒲冠者藤戸合戦』攷―

第一節では、貞享く寛保期の源平物浄瑠璃について、原則として竹本・豊竹の両座で初演された作品を対象に概括的な考察をおこなう、この時期の浄瑠璃作者による素材選定・加工の様相や作劇法について概観するとともに、以て本論文全体でおこなう浄瑠璃戯曲の分析手法の大枠を提示した。

第二節では、第一節で明らかにした近松と文耕堂の作劇法の差異に着目して『仏御前扇軍』を論じ、作品の構想における作者文耕堂と添削者近松との関係がどのようなものであったかについても見解を述べた。

第三節では、平家物語とともに源平物の重要な取材源である『義経記』から主に取材した作品として『鬼一法眼三略巻』を取り上げ、『義経記』と源平物との関係について検討した。

なお、平家物語と『義経記』とはほぼ同時代・同素材を扱っており、一つの浄瑠璃作品の中に両者から取られた素材の混在していることはしばしば見受けられるものの、平家物語と『義経記』の性格の違いを考慮すれば、その受容のあり方には何らかの差異があるの

ではないかと考えられる。本論文では論点を明確にするため、基本的に平家物語を主たる題材とした作品のみを考察の対象としたが、源平物を論じるに際しては、平家物語と同様に源平物の取材源として重要な位置づけにある『義経記』をも視野に収める必要がある。本節はそうした見地から、主に『義経記』に取材した作品の例として『鬼一法眼三略巻』を論じたものである。

第四節では、『ひらかな盛衰記』を取り上げて、平家物語内部では一連の筋を構成する説話群を一つのまとまりとして捉えるのではなく、個々の説話に注目して、前後を入れ替える、説話のポイントをずらす、まったく関連のない説話と結びつける、等の加工を施すことで、各話柄を戯曲の中に必然性を持つ形で位置づけるという説話受容・再構成の手法が取られていることを論じた。

第五節では、『蒲冠者藤戸合戦』について考察し、利用が明白な説話はその骨格だけを生かしながら、一方でその遠景には平家物語に見られるような「あるべき主従の姿」を据え、それと対比する形で登場人物の過去と現在を設定したことで、平家物語に描かれる武士の生き様を「説話」というレベルを超えて鋭くつかみ取り、作中に効果的に用いていることを明らかにした。

以上のとおり、第一章では平家物語と浄瑠璃作品を「説話」とい

う小単位に着目して直接比較することで、浄瑠璃作者が平家物語にどのように接し、どういった形で加工して作中に取り入れていったかを中心に論じている。

#### 四、「第二章」の概要

第二章では、延享・寛延期（一七五一）の源平物浄瑠璃四作を取り上げ、謡曲や史書、文芸などの影響なども視野に収めつつ、この時期の浄瑠璃作劇法について述べた。

第二章は次の六節から成る。

第一節 延享・寛延期の源平物と平家物語―多様化する説話世界を踏まえた作劇の様相―

第二節 竹本座時代の並木宗輔―出発点としての『軍法富士見

西行』―

第三節 『義経千本桜』と平家物語、『吾妻鏡』など

第四節 『源平布引滝』―新たな作劇法への試み―

第五節 「実盛」という生き方―『源平布引滝』の作劇法を支

えるもの―

第六節 『一谷嫩軍記』試論―須磨の桜・笛・和歌―

第一節は、本章で対象とする延享・寛延期の源平物の作劇動向全般に関して概略と見通しを述べた。

第二節では、この時期の中心的作者である並木宗輔が歌舞伎から浄瑠璃作者に復帰した第一作である『軍法富士見西行』を取り上げた。本作における三種の神器に関するやや特殊な設定は、それなりの歴史的蓄積を持つ「説話」に基づいていることや、謡曲などから引き継がれた西行の基本造形が本作三段目の「ドラマ」を支えていることなどを論じた上で、本作は、平家物語等の緻密な読み裏付けられた中世に対する深い理解・洞察の発露という点では本作の数年後に初演された『義経千本桜』や『一谷嫩軍記』には及ばないが、たとえば謡曲の利用にあたっては、表面的な撰取に留まらず、より本質的な部分を三段目のドラマを支える形での確に用いているといった点に、宗輔の中世に対する確かな眼差しと、その後に到達した高い作劇水準の片鱗が明確にうかがえることを述べた。

第三節では、『義経千本桜』を対象に、平家物語のほか『吾妻鏡』の記事や謡曲等との比較をおこない、宗輔が平家物語の説話及びその周辺の記録・伝承・文芸類をどのように受け止め、浄瑠璃に取り

入れたかを考察した。この時期に竹本座で初演された源平物の傾向として、天皇または三種の神器を扱った内容が多いということが言えようが、こうした傾向の背景には、あるいは宗輔の青年期の体験（壇の浦近辺への旅及びその際に遭遇した大地震）などがあるのではないかと思われる。この時期の宗輔の作劇傾向を考えるに際して、彼のこのような経験・経歴を踏まえた考察をおこなうことは、平家物語及びそこに描かれる源平合戦に対する宗輔の態度を考える上で少なからぬ示唆を与えるものと思う。本論文ではこの点について十分に論じることができなかったが、本節はいわばその前段階として、『義経千本桜』一・二段目を取り上げて検討をおこなったものである。

第四・五節は『源平布引滝』を取り上げた。第四節は本作における説話受容の特色に着目し、平家物語の説話を「脚色しない」ことがかえって浄瑠璃としての脚色たり得ている、という作劇手法を取っていることを説話レベルでの比較を通して考察した。一方、本作における実盛の造形は、第四節で述べたような作劇法を取る上で欠くことのできない重要な要素となっていると考えられるため、第五節では本作における実盛の具体的人物像を中心に論じ、以て『源平布引滝』の作劇法が平家物語の深い読みに支えられていることを改

めて検証した。

なお、本論文のうち、『源平布引滝』のみ論が二節にわたっているが、これはいま述べたとおり、一つの作品を多角的に論じることで作劇法の特質を明らかにすることを企図したため、節を分ける方が論旨が明確になると考えた故である。

第六節では、「統象」としての「桜」に注目して『一谷嫩軍記』を論じ、本作が後世に生み出された「桜」のイメージと、「忠度―和歌」「敦盛―笛」という平家物語に根ざす伝統的な説話世界との双方を包含しつつ作品を構成していることを述べた。中世以来の伝統的イメージと後世に生み出された新たなイメージとを作中で見事に融合させた本作は、『清和源氏十五段』以降約二十五年にわたって、様々な作劇手法を用いながら語り物としての浄瑠璃と平家物語との関係を追及し続けた宗輔の作者生活の集大成として正にふさわしい作品だと言える。

以上のとおり、第二章では、平家物語以外の源平物の素材についても「説話」という「メディア」を通して捉えることで、従来とは異なる着眼点からの作品論を試みた。

## 五、「第三章」の概要

第三章では、宝暦期以降の浄瑠璃作品を対象として、浄瑠璃が現代劇としての活力を失いつつあった状況において、源平物浄瑠璃がどのように扱われるようになっていったかという点を中心に、この時期の源平物の作劇法について検討をおこなった。

第三章は次の四節から成る。

第一節 平家物語受容の諸相―源平物の位置づけを巡り、俊寛の造形に及ぶ―

第二節 源平物浄瑠璃と地域伝承―『菖蒲前操弦』『那須与市西海硯』を例に―

第三節 源平物としての『祇園女御九重錦』―その浄瑠璃史的  
位置づけを巡って―

第四節 説話解釈の定着と変容―局面と人物造形―

第一節では、宝暦期以降の浄瑠璃史における源平物の位置づけについて概説するとともに、『姫小松子日の遊』の俊寛について、近松の『平家女護島』と対照させて論じ、本作が平家物語の俊寛説話における「足摺」の位置づけを踏まえた上で、先行作の脚色を巧みに

利用して新たな俊寛像を造形していることを述べた。また、平家物語以外の取材源である「大岡忠相録」の撰取の様相を併せて検討し、従来とは別の側面に着目して説話の撰取をおこない、さらに平家物語とは一切関係のない近世の裁判説話から状況だけを借用してきてはめ込むという脚色の仕方に、この時期の説話享受の態度や作劇手法が顕著に表れていると考えられることを指摘した。

第二節では、『菖蒲前操弦』『那須与市西海硯』『義仲勲功記』を主たる対象として、浄瑠璃と地域伝承との関わりについて、地域伝承から浄瑠璃へ（浄瑠璃作者が伝承や説話をどのように取り入れ、浄瑠璃作品として構成し直しているか）、浄瑠璃から地域伝承へ（浄瑠璃の趣向が地域伝承にどのような影響を及ぼしたと考えられるか）、の両面から考察した。

第三節では、『祇園女御九重錦』を取り上げた。『祇園女御九重錦』は、現行の上演形態では「源平物」としての印象が非常に希薄な作品であるが、本作の源平物としての性格を分析するとともに、その浄瑠璃史的な位置づけについて検討をおこない、この時期に新作された浄瑠璃作品の中で源平物がどのように扱われていたのかについて論じた。

第四節では、それ以前の節とはいささか趣を変え、浄瑠璃作者が

伝統的に好んで扱った平家物語の説話や人物及びそこから派生した近世演劇的な局面を取り上げ、浄瑠璃の新作が次第に質的・量的レベルを低下させつつあった宝暦期以降を中心に、それらがどのように解釈され変容していったかを検討した。具体的には、局面として「勘当」を、人物として長田忠致・番場忠太・土佐坊・斎藤実盛を取り上げ、この時期の作劇の主眼が次第に脚色や趣向の末端に移っていき、劇の本質的な部分とは関わらないところで意外性を狙うようなものに走っていった作品が増えてきたと考えられることを述べた。

以上のように、第三章では浄瑠璃の「劇」的側面ではなく、そこに展開される局面や趣向に注目して考察することに重点を置いて論じた。

## 六、「附論」の概要

本論文は、基本的に源平物のみを対象として、「説話」という観点から浄瑠璃の作劇法について分析をおこなっている。しかし、「説話」という切り口が浄瑠璃の戯曲研究において十分に有効であることを

述べるためには、源平物以外の作品においてもこの手法が有効かどうかについても検証する必要があるとの見地から、附論では『木下蔭狭間合戦』を取り上げて論じた。附論での検討により、源平物以外の浄瑠璃作品の検討においても「説話」を切り口とした分析が十分に有用であることを示し得たのではないかと考えている。

なお、附論として『木下蔭狭間合戦』を取り上げたことの意義としては、本作が、寛政期以降、時代物の中で源平物に代わって人気を得た太閤記物であり、かつ明和頃から浄瑠璃の取材源として注目されるようになった実録とも関連の深い作品であることから、本作を論の対象とすることで、第三章までで対象としなかった時代・ジャンルについて触れることができた点も挙げられる。また、本論文では浄瑠璃と歌舞伎との関係を十分に論じていないが、『木下蔭狭間合戦』は歌舞伎からの影響も受けており、本作を論じることで浄瑠璃と歌舞伎との交渉の様相の一端を見ることができたものと思う。

## 七、「結語」の概要

結語では、本論文で新たに提起した方法論が有効であったと考え

られる点を整理するとともに、本論文の段階では十分な考察をなし得ず、今後の課題として残された諸点についてまとめた上で、「説話的観点からの浄瑠璃研究」を今後さらに発展・展開させていくために、戯曲研究のほかに考えられる論点について述べた。

結語においてまとめた本論文の課題としては、歌舞伎についての言及が非常に少ないこと、源平物以外の諸作品について十分な考察がおこなえなかったこと、などがある。

一方、「説話的観点からの浄瑠璃研究」を作劇論の範疇のみに留めず、さらに広く展開させていくために、今後考えられる論点の例として「かしら」と「芸論・芸人の逸話」を挙げ、「説話」という観点から「かしら」「芸論類」を考えてみるとどのような論を立て得るかということに関して、短いながらも具体的な事例（かしらについては『心中重井筒』『六軒町の段』の重井筒主人のかしら、芸談類については二世豊澤団平の逸話）を挙げて見通しを述べた。

## まとめ

本論文は説話的観点から浄瑠璃の作劇法について分析をおこない、

その特質を明らかにすることを試みたものであるが、結語にも述べたとおり、説話という観点は、作品論以外の浄瑠璃研究の諸課題に応用展開することが十分に可能であるものと考えられる。

「説話」という視点を浄瑠璃研究に導入することはいかなる意味があるのか、そもそも浄瑠璃に「説話」という切り口が馴染むものであるのか、本論文でおこなった分析は、こうした問題意識を含む課題の一端を論じたに過ぎない。本論文での考察がありきたりの素材論に留まっているとすれば、それはひとえに本論文の課題設定がそうした方面に偏っていたためであり、それは「説話」という切り口の限界を示すものではないと考える。

「説話」を広く「世界を認識するメディア」ととらえるならば、「説話」が浄瑠璃研究で果たす役割は単なる作品論の範囲にとどまらず、浄瑠璃という世界の認識に、さらに豊かな視野をもたらす可能性がある。今後、作品研究以外の浄瑠璃周辺の問題についても、説話という視点をさらに追求することで、新たな可能性を見出し得るのではないかと思う。